

アデリーペンギンの個体数変動と環境変化

Population dynamics of Adelie penguins and environmental change

高橋 晃周 [1]

Akinori Takahashi[1]

[1] 極地研

[1] NIPR

南極リュッツォ・ホルム湾袋浦では1995年より5カ年計画で、アデリーペンギンルッカリー（営巣地）でのペンギン生態研究「SIPENS」(Sea Ice and PENguin Study)が行われた。1998/99年も様々な調査が行われたが、その中で特に興味深かった事実は、雛の生残率が極めて低かったことである。1998/99年に得られた巣立ち間近の雛の生残率は40%以下であり、これは過去の袋浦や他の繁殖地（ロイズ岬、バード岬、クロイツァー岬）で報告されている63.3-83.2%と比べてもかなり低い。このような低い生残率はどのような原因によって引き起こされたのか、雛の成長、親の採餌トリップ長、などの経時データなどから推察をこころみるのが、本研究の目的である。雛の生残率の急速な低下は、雛がクレイシ期に入った1999/1/31から2/15の間におこっている。死因のほとんどは餓死であった。このことは雛の平均成長速度が1月下旬に負に転じていることとよく対応している。また、この時期の親の平均採餌トリップ長はそれ以前の4倍近くにのびており、さらに平均餌重量（胃内容物重量）もそれ以前に比べて有意に低い。すなわち、雛の生残率の急速な低下は直接的には親の給餌頻度の減少と一回の給餌量の低下によるものと考えられる。発表では、さらに親の採餌場所・深度、餌の組成、ルッカリー周辺の氷の状況の経時変化データを加えて総合的に議論する。